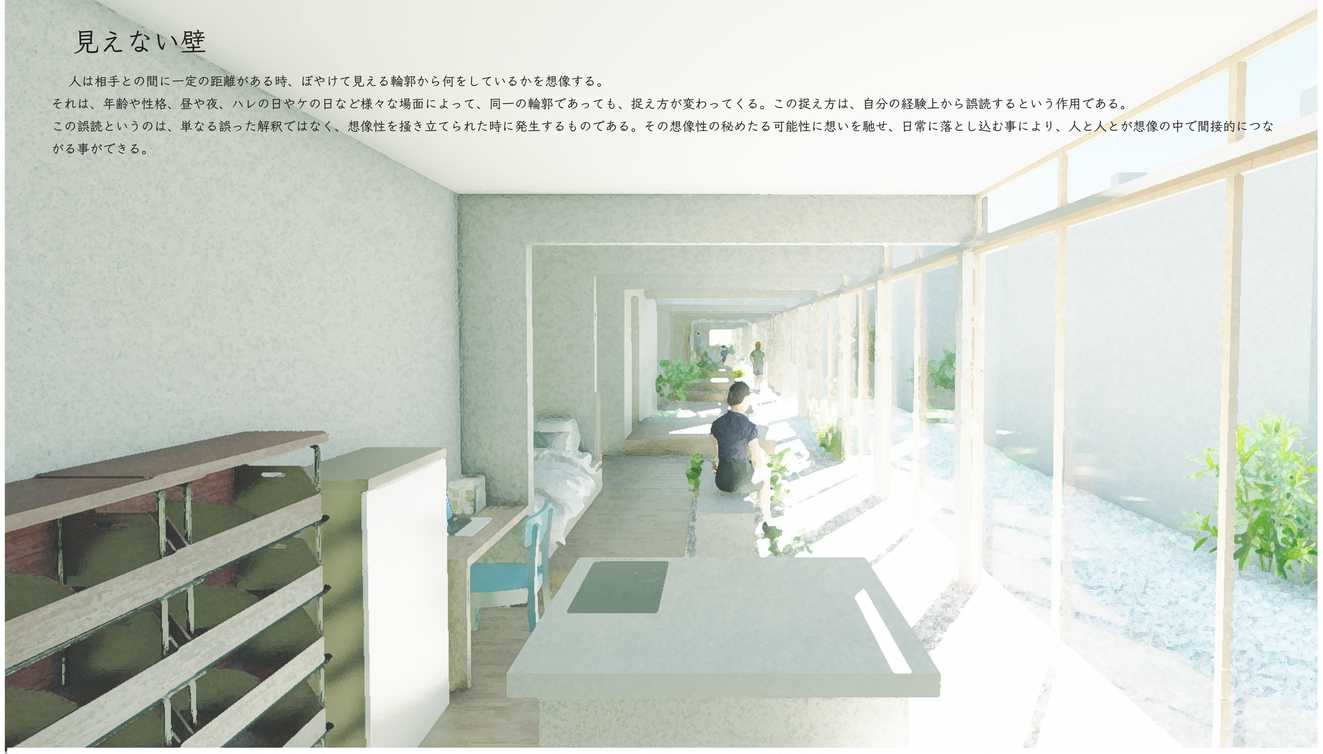
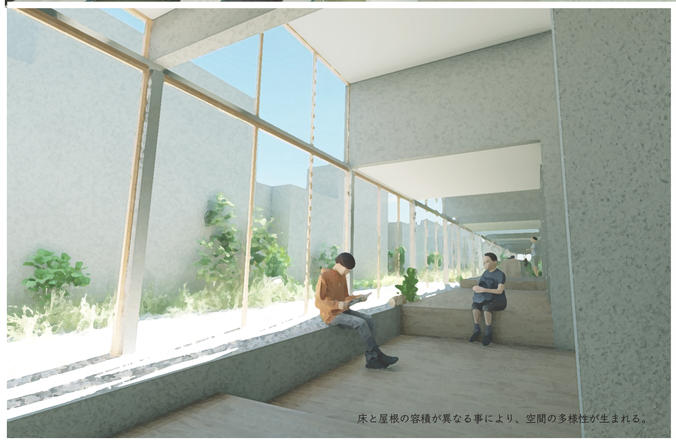
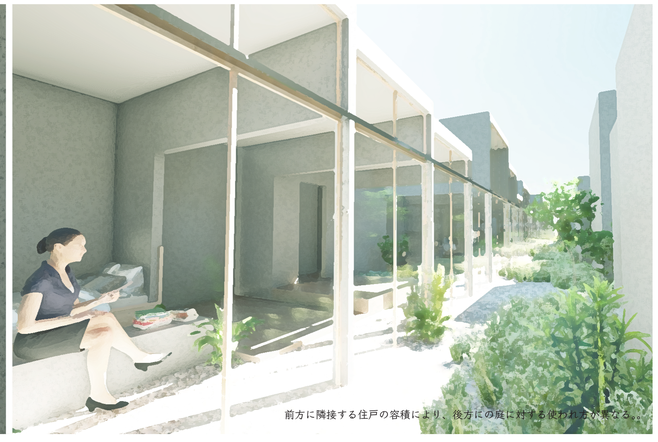
見えない壁

人は相手との間に一定の距離がある時、ぼやけて見える輪郭から何をしているかを想像する。
それは、年齢や性格、昼や夜、ハレの日やケの日など様々な場面によって、同一の輪郭であっても、捉え方が変わってくる。この捉え方は、自分の経験上から誤読するという作用である。
この誤読というのは、単なる誤った解釈ではなく、想像性を掻き立てられた時に発生するものである。その想像性の秘めたる可能性に想いを馳せ、日常に落とし込む事により、人と人とが想像の中で間接的につながる事ができる。





床と屋根の容積が異なる事により、空間の多様性が生まれる。

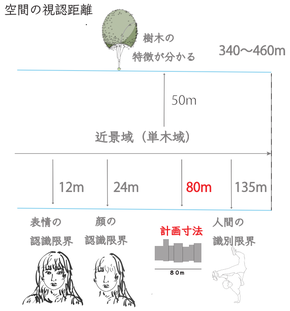


前方に隣接する住戸の容積により、後方にの庭に対する使われ方が異なる。

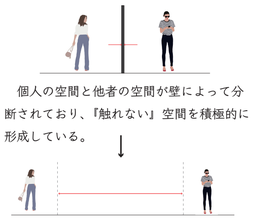
0，触れないの解釈

ある新型感染症ウイルスにより、触れていた社会から切り離され、強制的に触れない社会へと放り出された。触れることの重要さ、貴重さを知った。
現在の住宅は、壁という強制的に触れない機能が滞在している。そのような触れないを可視化したものを取っ払う。そうすることで、人と触れ合える環境をつくる。ここに距離を追加する。そうすることで、実在しない、可視化されない壁を作り出す。
このように距離を取ることにより、選択制のある隔たり　　ができ、同一空間において　、何処かで遮断されていたり、何処かで繋がっていたりと、非常に曖昧な関係性が出来上がる。この繋がっていないようで、実は何処かで繋がっている。という新しいコミュニケーションの形態が形成される。この形態が、これからの住宅において必要なのではないだろうか。

1，空間の視認距離



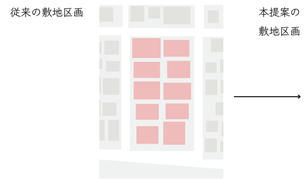
2，空間を隔てる機能をなくす



個人の空間と他者の空間が壁によって分断されており、『触れない』空間を積極的に形成している。

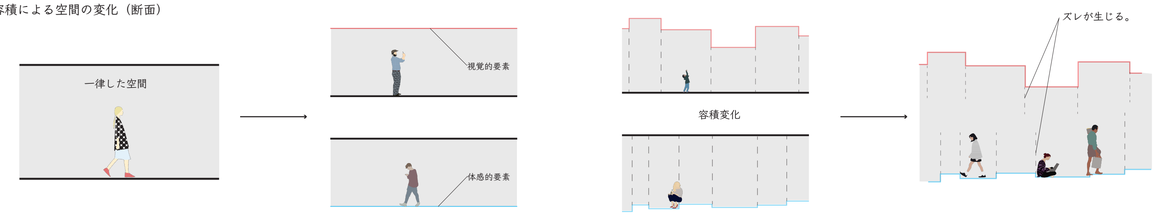
壁の代わりに物理的距離をとることで個人の空間を確保しながら、家族内で『触れていないようで触れている』空間をつくり出す。

3，住居地域の新たな区画



従来の敷地区画は、大きな一つの区画を、隣接した道路に面して割り振られている。本提案では、短冊状に敷地を区画することで、両端を道路面に接する事ができ、Y軸方向の距離を確保できる。

4，容積による空間の変化（断面）

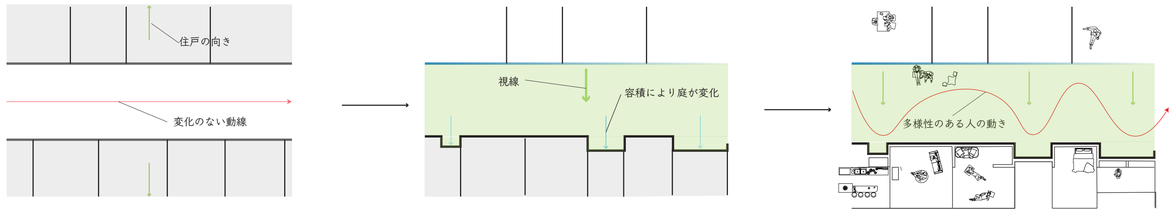


従来の住宅では、同一空間において、屋根、床が一律となっており、空間の要素の変化に乏しい。

天井と床では、それぞれ感じる要素が異なる。それぞれの要素に凹凸をつける事により、要素を強調させ、空間に容積の変化を与える。

異なった要素の空間が重なる事により、空間に多様性が生まれ、不統一な空間が出来上がる。

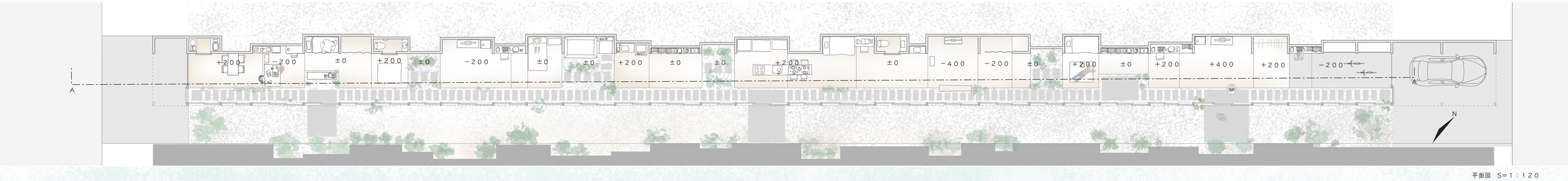
5，容積による空間の変化（平面）



従来の住宅では、住宅同士が背を向き合った空間が生まれ、隣地と断絶されたような空間ができている。

後方の住宅を前方の住宅に向け、開く。室内の空間構成により生まれた容積が、後方の庭空間を操作する。

庭空間が前方の容積により変化し、それに合わせて、後方の室の空間に変化が生まれる。隣の空間同士が影響を及ぼし合う新たな住居タイプが出来上がる。



平面図　S=1：120

X-X' 断面図　S=1：120